

いろいろな場面でできる都道府県名の学習をしていきましょう!!

埼玉県 公立小学校教諭

1. はじめにー社会科の重要性を示す絶好の機会ー

去る11月18日の中央教育審議会・教育課程部会で文科省が配布した資料で「各教科等で身に付けさせたい基礎的・基本的な知識・技能等(例)」が示された。社会科においては、都道府県の名称と位置、日本の歴史の世紀などの年代の表し方と時代区分、約束や取り決め、ルールなどの法の意味などが記されていた。特に、都道府県の名称と位置は、社会生活をしていく上で不可欠な知識である。一般の社会人として最低限社会科で教えておいてほしい知識であると考えられる。しかし、現実を振り返ると、帝国書院の「県名認知度調査」などでも正答率50%を超えたのは11都道府県だけであった。このような現実に対して、私自身の実践事例を紹介していくこととする。

2. 都道府県の名称と位置を遊び感覚で学ぶ地図パズル学習(さいたま市立東岩槻小での実践)

「今年の子どもたちは、埼玉県や東京都の位置もわかっていないんだよな。」「プリントでも作って教えておかなければ……」こんな会話が職員室でされていた。熱心な教員ゆえでできた言葉だと感じた。偶然、100円ショップでみつけたウレタン性の日本地図パズルを持っていたので、その先生に紹介したところすぐに使ってくれた。何人かの先生が集まってきて、「おもしろそう!」「うちの組もやらせてみるかな?」ということになり、お店に問い合わせた結果で3年以上の全員に持たせることとなった。授業で一時間程度指導した後は、給食の待ち時間、朝自習の時間(一定期間集中して実施)など課外の時間を活用して遊ばせていった。「成す事によって、学ぶ」のごとく、子どもたちは、感覚的に位置と名称を理解していった。当初20分かかかった子も、1週間後には5分程度で完成できるようになった。修了証等でその成果を誉めていった。そのうち、子ども同士で裏技がでてきた。たとえば、九州地方、四国地方のパーツを先に選び出してはめていく子、関東のように小さい都県が多い所からする子など、遊びを通して位置認識をしていく姿がみ



地図パズルをする子どもたち

られた。

このようにして、課外で学んだ知識が社会科に生きるようになってきた。家族でも行わせた。

3. テレビニュースによる学習(ニュース地理)

今年のJリーグは、ガンバ大阪の劇的な勝利で閉幕したが、12月3日のニュースでは同時に行われた5試合が実況されていた。今までにない珍しい光景であった。試合前日、子どもたちがサッカーの話をしていたので、「五つの会場はどこにあるの?」と尋ねた。セレッソの本拠地長居(大阪)、ガンバ戦の等々力(?), 鹿島戦の鹿島(茨城)、ジェフ千葉のフクアリ(?), レッズ戦の新潟(新潟)。等々力とフクアリが何県かわからない。試合後の月曜に答えることにした。ちょっとした会話であるが、子どもたちはよく調べてきた。「では、次に聞かれることを予想できる?」と聞くと他の試合会場の位置だと気づく子がいた。このように軽い投げかけでも子どもは位置を調べるのである。教室の古新聞をもとに県名や位置を意識させるのもよい方法である。生活の中における地理学習は大切なことである。

4. 給食や食材による学習(食いしん坊地理)

最近、「食育」ということが叫ばれているが、産地表示や地場産の食材なども、格好の素材である。先日、給食で鮭がでたので、「この魚どの辺りで獲

れるのか知っていますか？」と投げかけたところ、ほとんどの子がわからない。では、「いわしは？」「まぐろは？」……ほとんどわかっていない。そこで、地図帳の水産業のところに載っていることを知らせると何人かが調べはじめた。北海道の方から届くことをみつけた子が、どうやって運んでくるのか興味をもちはじめた。このほか、りんご、みかんなどの果物の場合には、給食室にダンボールが残っているので借りて紹介する。納豆や袋入りの豆などは製造元を見る。このような活動を通して、県の位置や名称だけでなく名産品と結びつけた学習が可能となる。さらには、気候条件と関連づけた学習、料理法の工夫など生活の知恵へと発展させることができる。このように、生活や食事と結びつけた都道府県名の学習は、教員と子ども双方が楽しい雰囲気で行うことができ、可能ならば家庭科とも関連づけて食べる授業を行うことができるので、定着率もいっそう高まっていく。

5・6年の農業や国際理解においても発展可能でもある。食材は、生活密着教材の王様である。

5. 旅行計画学習における学習（旅行地理）

夏休み、冬休み前になると、子どもたちから田舎に行く話や旅行に行く話を聞くことが多い。ちょっとした言葉かけにより、都道府県の学習に発展させることができる。たとえば、秋田に帰る子を例にすると、「車、それとも新幹線？」「去年はお土産に何もらった？」と聞くと、「新幹線。きりたんぽをお土産にもらった」などと答えてくる。そこで、一歩深めて、「何新幹線？きりたんぽってどんな風に食べるの？」など、地図を見ないと答えられないことや、寒い中で食べるおいしいきりたんぽ料理など、気候や生活がみえるようなことを聞くと、「今度、聞いてくる」となる。このような日常会話ができる学級では、自然と地理に興味をもつ子が増えてくる。すなわち、都道府県名の名称や位置は、単純に覚えるのではなく、「学級の○○さんが行って来た◇◇」というように具体物や具体的な生活と結びつけて覚えた方がより質の高い学習へと発展させることができるのである。

6. 教員の出張してきた土地をもとにした学習

私自身、教員としてあちこちの県に出張すること

がある。子どもたちに、「先生、昨日はどこ行って来たの？」と聞かれるので、市外出張の際には、その名物や写真、パンフレットなどを意図的に収集してきて紹介するようにしている。広島県ならば、「原爆ドーム」の模型をしばらくの間教室に飾っておく。沖縄ならば「星砂と熱帯魚カレンダー」。先日も、埼玉県熊谷や深谷に行ってきたが、「五家宝や赤レンガの破片」を持って帰ってきた。赤レンガの破片は、渋沢栄一のレンガ工場製品で、富岡製糸場や東京駅など文明開化の原点となったものである。教室の常時掲示の埼玉県、日本、世界の地図で位置を示して説明していくようにしている。そして、説明した場所に印をつけておくようにしている。1年間で、おおよそ全都道府県、県内の主な都市には印がついていく。児童の地図帳に印をつけることもある。積み重ね学習が大切である。

7. 学校間交流による相手校の地域理解に基づく都道府県の位置と名称、そしてその土地の生活の知恵を学ぶ学習へ(人とのががわり地理)

子どもたちが、都道府県の位置や名称の学習の必要性を感じるのは、手紙を送付するときやどこから届いたかを知るときなどである。そのときは、自分の県の理解の必要性を感じるときでもある。

かつて、NTTと共同でテレビ会議システムの全国研究をした際、必ず双方の学校は日本地図で自校の位置を示し、地域の特色や名産を紹介していた。学校によっては、三味線で民謡を披露したり、お互いの県の歌を紹介し合唱したことがある。相手が1500km離れた土地で画面ではじめて会ったにもかかわらず、双方とも卒業まで忘れていなかったことがある。文通やEメール交換でも同様の効果が期待できる。いくら都道府県名を小テストで詰め込むよりも、感動がある学習の方が定着率は計り知れないほど高い。情報通信手段の進歩を生かした学習の広がりを期待している。

8. おわりに一各学校の教育課程に位置づける一

みなさま方の学校では、今まで述べた実践は、はたしてどの教科に位置づきますか？都道府県の位置と名称の学習は、教員各自に委ねるのではなく、上記の実践等をもとに、学校力を挙げて独自の教育課程に位置づいてこそ、花が開くのです。